
 会員からの声

今何故『だちょう』なのか

小久保 謙

農業生産法人(有) オーステックジャパン

1. だちょうとの出会い

動物園で見ることしかなかった『だちょう』(オーストリッチ)が私の目に畜産物として映り出したのは、今から6年前のことです。ドイツで開催された施設園芸に関する大きな展示会があり、その見学旅行の際に、ヨーロッパでだちょうが注目されつつあるとの情報から、旅程にだちょう農場の見学や、だちょうを専門に診ている獣医師のミニセミナーを組んだのが始まりです。5戸程訪ねた農場の中で、1戸は私と同じ酪農家でした。この農場で、乳牛と全く同じように放牧場で牧草を食べるだちょうを見て、私が今後の日本における畜産に抱えた課題と重なり合い、強く心に響くものがありました。

2. 低公害のだちょう

農場主の話は、ドイツでの畜産公害の関わる問題から始まりました。ドイツでは牧草地に投入される糞尿の量について厳しい基準があり、所有面積に見合った分の乳牛しか飼養できないとの事。しかしそれでは十分な所得が得られないので、乳製品の加工や民宿をやったりしているのですが、だちょうの畜産物としての価値がその解決策になっていると云うのです。その大きな利点の1つが、つまり、乳牛と比べて採食量、体重当たりの糞尿の量が非常に少ない事です。同じ面積で乳牛を飼養するよりだちょうを放した方が、最終所得が多くなるとの事でした。

3. 高飼料効率

だちょうの消化管は、鶏が胃の外部に砂嚢を持つものに対して、胃が2つに分かれ砂嚢部と従来の胃の部とが存在する。親だちょうでは、1~1.5 cm位の石を両手の平に一杯になるくらい蓄え、粗飼料の破碎を行います。牛が4胃を持つものに対して2胃を持つような構造です。又、大きな盲腸を2つ持ち、さらに鳥類では考えられないくらい長い小腸と大腸を備えています。口から飼料が入り排泄されるまで、鶏では7~8時間と聞きますが、だちょうは32~35時間かけてゆっくり、完璧に消化します。草食動物である乳牛をはるかに凌ぐ、繊維の消化率を持っています。だちょうの成鳥の糞にハエが殆ど寄らないのは、こんな消化率の高

さの結果なのかと想像しています。

しかし、乾牧草はだちょうの長い首と採食方法から給与が難しく、1~2 cmに細断するか、または、海外でテストの始まっているフォーレージハーベスターで収穫したサイレージでの給与が、家畜化された時にはより便利だと思います。私たちの農場でも今冬には、デントコーンサイレージの給与テストを行いたいと考えています。

もちろん、全飼料は全育成段階で100%粗飼料が可能なわけではなく、特に、経済動物としての発育や繁殖能力を求めると穀類の給与も必要ですが、全飼料中の粗飼料率は、最低の時期で50%程度給与でき、しかも牛のように反芻を要するわけではないので、物理的な形状は粉末でも構わない点で、粗飼料といっても繊維を含む多くの副産物の利用も可能であると思われる。

4. 高い繁殖性

ドイツ訪問の際、だちょうを専門に診ている獣医師に4時間余りのセミナーを行ってもらい、だちょうの全体像について学びました。その中で、繁殖性やその管理について、同行メンバーの中で私一人が酪農家でしたが、とても合点の行く管理方法がありました。それは乳牛でいう乾乳期を設定し、10年近くにわたって繁殖を行う管理サイクルについてです。つまり、乳牛において、分娩、泌乳、妊娠、乾乳のサイクルの中で継続的に生産を数年にわたって行い、また、乾乳期の存在が、またその量や値が、泌乳期の生産性に大きく影響することは酪農家なら誰でも知っていることで、実はだちょうも全く同様のサイクルを繰り返して生産を続けるのです。本来だちょうは、野生では50年近くの寿命を持つと言われていますが、経済動物としての寿命は10~15年と言われていました。人工授精が未だ開発されていないだちょうにおいては、まず雄と雌との交配が必要になります。小規模な群においては、雄1×雌2~3羽でのつがいを1グループとして行うのが普通です。年間の管理は、地域差や個体能力差にもよりますが、約8~9カ月の産卵期と3~4カ月の産卵休止期に分かれます。雌は約2歳で産卵を開始しますが、その後この産卵—休止のサイクルを繰り返すことになります。そして乳牛の場合と同様に、この産卵休止期

の管理が、産卵数や卵の品質に大きな影響を与える重要なものになります。だちょうにおける経営は、一環経営の場合、繁殖用の親鳥を持ち卵を生産させ、それを孵化育成して肥育用もしくは後継繁殖用へと育成することになります。その中で、有精卵率と孵化率は卵の品質に起因する要素が大きく、したがって、産卵休止期の栄養管理が重要になります。また、産卵休止期の設定時期は、栄養コントロールと雌雄の分離などでかなり人為的に設定できます。つまり、だちょうの繁殖には適さない本州の梅雨や台風の時期を産卵休止期に設定することも出来るのです。また、産卵期のポディーコンディションや産卵数に合わせて、休止期の時間を長くする必要も生じるでしょう。こうした管理上の技術が、だちょうの生産能力を左右することになります。

5. 食材として

ここで、畜産動物として最も大切な生産物の価値について触れておきたいと思います。まず羽毛ですが、だちょうの家畜化の歴史の中で最初の利用はこの羽毛です。今でも南アフリカ共和国の主産地のアウトホーン地区に行くと、フェザーバロン（羽男爵）と呼ばれた、羽毛で大資産を築いた農場主の大豪邸が存在します。現在では芸能、ファッション界で雄の白い大きな翼の羽が利用され、その他の部位は、静電気を起こさないことから、グスターや夜具、衣料品に利用されています。次に皮革ですが、オーストリッチの名で高級皮革製品に利用され、近代オーストリッチ産業200年の歴史の中で、未だに一番大きな部分を占めている生産物です。日本は世界最大のオーストリッチ皮革の輸入国であり、すでに安定した需要が存在します。そして近年急速にその需要が高まっているのは食肉としての価値です。だちょうはとうもろこし換算で飼料効率が豚の10倍と言われ、しかも粗飼料を主食とする為、現在海外からの飼料穀物に依存し、又その供給に将来

の不安を抱える日本の畜産にとって、食肉の国内自給率を高め、又余った輸入穀物が他国へ移動することで、不足している国々に間接的に貢献できると思われま。可食部の栄養価については、別表のような成分になっています。低カロリー、高蛋白質、高ミネラルの近代型の食肉として申し分のない栄養価を持ち、しかも誰にでも食べられる全く癖のない美味しい食肉として、今後一定の需要が期待できます。国内での飼育技術が安定すれば、高い飼料効率と繁殖性に支えられ、一般家庭でのテーブルミートとして価格面でも受け入れられるでしょう。

現在ヨーロッパ全域で年間約3000tの消費があり、年々増加しています。ヨーロッパ域内からの供給では不足しており、チルド輸送で南アフリカから輸入している状況にあります。私も早く日本でも一般的に普及できればと全国の仲間達と活動を行っています。

6. ま と め

畜産動物として最低限必要な要件である生産性、環境適応能力、飼い易さ、食材としての価値、さらに今後の畜産動物として必須の要件と考えられる低畜産公害や飼料が人と競合しない点などを考えると、だちょうには大きな可能性があると考えています。しかし動物園の動物が畜産動物へ変身するには、法的な整備、屠畜処理場、飼育技術、育種改良、消費者へのPRなど、まだまだ多くの障害が立ちまわっています。

現在だちょう産業の全国組織として日本オーストリッチ協議会が組織され、産業基盤確立の為に、政府や関係官庁への働きかけ、マーケットの掘り起こしのための活動、そして大切な生産現場での技術情報の提供や関連業者との連携等、活発に活動を行っています。私もその一員としてだちょうの可能性を信じ、北海道東藻琴村から仲間達と共に頑張っていきたいと思えます。